

シンポジュームの後に

茂田井 教 亨

「本尊論の再検討」ということでシンポジュームを開き、わたくしも発言させて貰った。皆さん熱心にそれぞれ意見を發表されたことは、大学の研究室などでは見られない光景で、大へんありがたいことだったと思う。

いわゆる「本尊論」は、「本迹論」と並んで、従来から本宗教学上、重要な課題とされてきた。たしかに本尊は信仰の依処えしよであり、これが不統一では信仰にも各種各様の差異があるようで、一教団・一宗門として香ばしいことではない。しかし、従来しばしば交わされた論議は、多く解釈上の問題で、法・仏の問題でも形式論の問題でも、何れもこちらの受取り方の問題であった。自己が宗祖の流れを汲む一人として、どのような信仰に立ち、それがどのような実践化されて行くかという反省に立つてなされた論議では

なかった。今回のシンポジュームで、それが問題となり、信仰自体の立場、教団としての歴史的伝統の立場、また、その行政的實際面の立場などが、それぞれに話題となったことは、ひとつの進歩として悦ばしいことと思う。

曾て清水竜山先生もいわれたように、本尊はいわゆる問題視すべきものではない。つねに敬虔に祖師の教示に聞くべきであろう。しかし、長い歴史と多くの宗徒が出来ればそこには意見の相違や受取り方の相違が生ずるのも止むを得まい。「宗学」というものがそれに対してひとつの指針なり、示唆を与える役目を有たなければならぬことも当然である。

本尊は問題扱いすべきものではないが、その解釈や理解に放置を許されない事象が起きれば、われわれは、謙虚に

そして真剣にその問題と取組まなければならぬであらう。このシンポジウムにも、出席された各氏のなかに、そうした自覚が言わず語らずの裡に出ているようである。それが可成り忌憚なく各自の意見を開陳させたものと思う。そして結論的には、それぞれの発言に、それぞれニュアンスの相違はあっても、本質的には、誰も異質的な考え方を有っていないということがいえるということであった。

宗門には教学上の問題で論議が醸されると、直ぐ何か曖昧な問題があるかのように錯覚を起す人があるが、それは禁物で、そういうことがどうして起きたのか、また、それがどのようなに扱われているかを見究めるだけの知性と矜持があつて欲しい。

とにかく、今後の宗門は、もはや本尊をいわゆる問題扱いにして論議すべきではない。それは、本尊論議を無視せよというのではない。本尊については、宗門人の各自が、謙虚に、そして真剣に祖書に直参すれば、曙光がいつの間にか雲間を破って現われるように、自然と会得される時がくるものである。それよりもっと将来性を有つ問題に宗門は取組まなければならぬことがらが山積している。例えば、日蓮聖人の宗教——それが仏教としてではあるにしても——が実際に世界性をもつものとして、どのように諸

外国に没透して行くべきか、風俗や習慣・言語等を異にする特定の人びとの間に土着化されていくには、如何なる宗学が理論的媒介の役目をもつであろうか、というような問題だつてあるのである。また、さし当って政治と宗教との問題のごときも等閑に附するわけには行かないであろう。われわれは、もっと前を見て歩かなければならない。